

---

# けいおん ～奏でる物語～

桜 みずき

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

けいおん ～奏でる物語～

### 【Nコード】

N 8 7 5 6 Y

### 【作者名】

桜 みずき

### 【あらすじ】

朱智<sup>あけち</sup> 遼<sup>じょう</sup>は自分の容姿にコンプレックスを持っている。尖端恐怖症で伸びっぱなしになながらも、しっかり手入れをしている長髪と持ち前の童顔ちびっ子で女の子と間違えられる事がある遼はある日、軽音部の部長に半ば強引に軽音部に入れられてしまう。そこで巻き起こる軽音楽の物語。気まぐれに突っ走ります！

## プロローグ！（前書き）

始めましての方、始めまして！

お久しぶりの方、お久しぶりです！

さて、『けいおん　〜奏でる物語〜』が始まるよ〜

みんな一緒に「せえの！」でアレ言っよ！

せえの！！

『No Thank you!!』

ちよ！それEDでしょ！！

しかも、否定されたし！

ちなみに何て言えは良かったんだろw

では、本編をお楽しみ下さい！

ブローグ！

ピピピッ！…ピピピッ！…ピピピッ！…

自室に目覚まし時計のアラームが鳴り響く。

俺は重たい瞼を開けようと頑張りながら手探りでうるさい音を消そうと奮闘する。

「…あ…何処だっけ…？」

しかし、目覚まし時計にいつまで経っても触る事が出来ない。

いつもと同じ場所に置いているので、いつもと同じ場所に手を伸ばせばアラームを消せるのにもかかわらず、今日は目覚まし時計に触れる事ができなかった。

俺はこのままじゃうるさいので、しょうがなくベッドから顔を上げ、枕元を見る。

「あれ？」

やはり、枕元には目覚まし時計がなかった。ベッドの下を見てやると目覚まし時計が転がっていた。

俺はアラームを消すと、ベッドから降りて自室を出る。

リビングに向かうと朝ご飯がテーブルの上に並べられていて、キッチンではカチャカチャと音を立てながら皿洗いをしている同居人

がいた。

「おはよう、奈亮<sup>だいすけ</sup>」

俺は同居人、水河<sup>みながわ</sup> 奈亮に挨拶をした。

「お、起きた？ 遼<sup>りょう</sup>もおはよう」

「うん。おはよう」

俺達は2LDKの『広い』に分類される家賃7万円のマンションに住んでいる。とは言ってもまだ一週間だけだけど…。本当は俺一人で住むことになっていたが、訳があつて奈亮と一緒に住むことになった。

まあ、自慢じゃないけど、俺の親は結構な金持ちだったりするので、毎月12万円の仕送りがある。家賃も奈亮と半分ずつ払っているので実質家賃3万5千という格安だ。

奈亮は皿洗いが終わったらしく手を拭いてリビングに顔を出す。

「いよいよ今日だな」

不意に奈亮が言った。

「今日から高校生かあ…」

だけど意味はわかった。今日は俺達が入る高校の入学式。

『私立桜ヶ丘高等学校』

それが俺達の入る高校の名前だ。去年までは『私立桜ヶ丘女子高等学校』だったが、今年度から共学校になった。理由は良くは分らないが、巷では「少子化の問題ではないか」と言われている。

「男子何人いると思う？」

俺は奈亮に聞いてみた。

「さあ？ わっかんね」

俺達は席に座り、朝食を取る事にした。

卵焼きに、塩鯖、そしてみそ汁に白いご飯……毎回思うけど、100点の朝食だ。奈亮の料理の腕は本当に凄い。夕食もかなり手間がかかっているのを作ってくれる。しかも、料理以外の家事も全般やっつけてのけるものだから、将来は良い主夫になりそうだ。

卵焼きを半分に割ってみる。中は程よく半熟、さらにはチーズも入っていた。

その卵焼きを口にいれる。卵焼きが口の中でとろけ、一瞬にして味が口いっぱいに広がる。

「ああ……もう、成仏していい……」

「おいおい、大袈裟過ぎだ。それに、そこで使う表現として正しいのは、『昇華していい』だろ。成仏じゃもう死んでるぞ」

奈亮がツツコンでくれた。どうやらツツコミの腕も多少有るようだ。

そんなやり取りをしながら、20分弱奈良が作った朝食を堪能した。

・・・・・・・・・・・・・・・・

朝食を終え、自室に戻り桜高の制服を着た。深い紺色のブレザーに学年色の青のネクタイに紺色のズボン。それを身に纏った俺は姿見に映る自分をみた。

「……………似合わなっ！」

あまりの似合わなさについつい叫んでしまった。しかし、似合わない原因は自分の顔にある事は分かっているのではないことだ。

髪を切る事を躊躇いながら3年間も伸ばし、腰辺りまで届くようなしっかり手入れのしてあるサラサラな髪。男とは思えない可愛い顔。男とは到底思えない線の細い体つきに小さい背。誰がどう見ても男装をしている女子だ。

「はぁ……」

俺は溜息を吐きながらスクールバッグを持ち、自室から出た。

自室を出ると奈良が待っていた。

「遼も用意出来たか」

「……………」

「どうした？」

「いや、何でもない…」

奈亮は普通に桜高の制服を着こなしていた。元々背が高く、見た目も人目を引くほどのかつこよさがある。髪もワックスをかけているらしく、かなり決まっている。横を歩くのを躊躇したくなる程のイケメンになっていた。

「やっぱり奈亮ってかつこいいな」

俺は少し悪意を込めて言った。ただ単に奈亮がかつこよすぎるから嫉妬をしているだけだが…。

「そうか？おれは遼が女だったら良いな〜って思うこと結構あるぞ。可愛いし。私服姿なんてまんま女の子にしか見えないし」

「なつ…！！俺は男だ！可愛いとか言われても全然嬉しくねえよ／＼！」

「はっ！そんな顔赤くしちゃってさ、本当は嬉しいんじゃないの？」

「おうえ…BLとかやめろよ…。気持ち悪い」

「そうか？遼とだったら花があって良いと思うぞ？」

「奈亮…。それ本気で言ってるなら病院行ってこい」

「んじゃ学校行く前に病院行くか」

「マジで本気で言ってたの!？」

「あははは！嘘だよ嘘！ほら、時間無いから行くぞ」

「あ、うん」

俺達は新しい生活の第一歩を踏み出し……

「うお！」

奈良が何故か玄関で躓いた。

「空気を読んで欲しいね。まったく……！」

「何故俺はキレられた？」

「自分の胸に聞いてみる」

何はともあれ新しい生活の第一歩は踏み出せたから良しとしますか。奈良は異様に小さい一歩だったけど……。

## プロローグ！（後書き）

次回から原作キャラが出ます！

楽しみにしていて下さい！

ちなみに1週間に1回のペースで更新していきたいと思えます！

## 第一話『入学!』（前書き）

二日連続の投稿!

ふう…期末テストが終わったから気楽にいけて良いですよ

……あゝ…センター試験だるい…

では、本編をお楽しみ下さい!

## 第一話『入学!』

「入試の時にも思ったけど、やっぱり桜高ってデカイな…」

まだ肌寒さを残す4月の上旬ちよい過ぎ。私立桜ヶ丘高等学校の校門で、目の前に広がる桜高を眺めながら俺は正直な感想を述べた。

「だな。廊下もフローリングだったし、校舎の中もかなり広がったしな。さすが私立って感じた」

隣にいる奈亮も同意し、俺に繋げて評価の感想を述べた。

「まあ、こんなところで立ち止まってたら入る人の迷惑になるから、敷地内に入ろうか」

「ああ。そうだな」

俺達は桜高の敷地に入ろうと足を動かそうとした瞬間、左から声が聞こえてきた。

「その人達どいてえ〜!!」

左を向いてみると猪突猛進の如く駆け抜けて来る一人の女子生徒がいた。

奈亮は軽やかに避けたが、俺は反応速度が遅かったせいでその女子生徒に轢かれてしまった。

「あいた!」

「…って！」

女子生徒とその場に倒れ、俺は背中を強打し、手に持っていたスクールバッグも少し離れた場所に落としてしまった。

「つてえな…。おい、大丈夫か？」

俺は背中が痛くて仕方ない体を起き上がらせ、ぶつかってきた女子生徒の心配をする。避けられなかった俺が悪いしね。

「あわわわ…！だ、大丈夫です！す、すみませんでした！！」

女子生徒に怪我はなく大丈夫だったらしく、少し焦りながらも、しっかりと頭を下げて謝ってくれた。

「いや、そんな謝んなくていいよ。俺にも落ち度はあったから」

「何でもいいが、遼達の周りにギャラリーが出来てることを忘れんな」

「唯……何やってんのよ…」

「「えっ！？」」

奈亮の発言により少し焦り、周りを見渡して見ると十数人の生徒に囲まれていた。心なしか、大半の生徒は女子で、男子は四、五人しかいなかった。

そして、目の前にいる女子生徒は顔を真っ赤にして「本当にすみ

ませんでした…」と言ってメガネをかけた女子生徒と共に桜高へ入って行った。

「散々な目に遭ったな」

「うん。ていうか、背中めっちゃ痛え」

「ほら」

俺は背中中の痛みを訴えると、奈亮が手を差し出してくれた。その手を掴み、やっとの事で立ち上がる事が出来た。

「なっ!」

「遼?どうした?」

立ち上がり髪を整えようとしたら、髪の毛が背中中の半ばから腰辺りまでずたずたになっていた。という事は……。

「そんな…」

「そっか。遼は尖端恐怖症だからハサミを自分に向けられるのが怖いんだっとな」

「爪楊枝だって生まれてこの方使ったことねえよ!自慢じゃ無いけどな!」

「そっだな。自慢にならないな」

「にしてもどうしよう…。こんなになっただんじゃ、もうどうしようもねえよ…」

俺は自分の髪を見ていると、目頭が熱くなっていた。

「じゃあ、とりあえず髪を結ってみたらどうだ？それで多少はごまかせる」

仕方なく奈亮の案で妥協した。

近くに転がっていたスクールバッグを取り、バッグの中からゴムを取り出し、それで後ろ髪を纏めた。

「どう？」

「うん？ダメだな。これだけ髪が自由の利く縛り方じゃダメだ」

「じゃあ、どうしろと？」

「ポニテ」

「は？」

「ポニーテールにすれば良いと思う」

「出来る訳ねえだろ！恥ずかしいわっ！」

何を言い出すかと思えば…。前から言ってますが俺は男です。そんな女々しい野郎じゃありません！

「でも、そんなはずたの髪を晒し回るよりは良いと思うぞ」

「確かにそうだけど…」

「それにお前なら可愛いし似合うと思うぞ」

「だ・か・ら！可愛いとか言われても全然嬉しくねえよ！！」

だが、確かに奈亮の言う通りなので、俺は渋々髪をポニーテールに結うことにした。

髪を少しずつかき上げていき、髪を縛りポニーテールにした。

「どう？」

「バッチリ似合ってる！」

「似合ってるか似合って無いかを聞いたんじゃねえよ！髪は不自然じゃないかを聞いたんだよ！」

「ごめんごめん。大丈夫だよ。跳ねてないから気にすんな」

「本当に？」

ちよつと信じられないのでまた問い詰めたが、奈亮は焦った感じでこつ言った。

「って！やばい！あと、10分もしない内に入学式前のHR始まるぞ！」

「マジ！？」

時計を見てみると八時半を回っていた。

俺達はクラス分けを急いで眺め、同じ三組だったことを喜びながら教室へ向かった。

・・・・・・・・・・・・・・・・

その後、HRには間に合い、入学式も無事に終えた。そして、今は自己紹介と言っだるゝい消化任務なのだが、自己紹介に入る前にあった席決めでちょっと問題があった。右隣は奈良で何の問題もなく、嬉しいことだったのだが、左隣が問題だった。

何の因果か知らないが、左隣は今日の朝に俺にぶつかった女子生徒だった。

「私は『平沢 唯』って言います！」

そして今はその彼女の自己紹介の番だ。名前は『平沢 唯』と言う可愛い名前だ、良く見てみると結構可愛い子だったりする。

「好きなことは家でごろごろすることです！」（キリッ！

そして、性格が残念だった。

「（そんなことや顔で言われても……）」

「そ、そう。とってもユニークな趣味してるのね……。」

先生も呆れながらそう言った。

「えへへ。そうですかあ？」

それなのに平沢さんは褒められてると勘違いして、照れていた。

「それじゃあ次、朱智君<sup>あけち</sup>。お願いね」

遂に俺にも順番が回ってきた。何故か急に緊張してきたが、俺は立ち上がり勇気を振り絞って声を出した。

「俺は『朱智 遼』です。ここには先週引越してきたばかりなので、地元の事を良く知りません。なので、皆さんにいろいろとご迷惑をおかけすることがあると思いますが、精一杯頑張りますので、どうかよろしくお願いします」

すっかり言えた。と、自己紹介の余韻に浸ろうと思ったら隣の平沢から拍手が聞こえてきた。そして、その拍手が何故か教室中に広がった。恥ずかしさのあまり平沢にチョップをお見舞いした。

「あいた！」

「自業自得だバーカ」

俺は小声で平沢に言った。

「遼ちゃん照れてますな」

「遼ちゃんとか言っな。女の子っぽいだろ」

平沢の発言はスルーして、変な嫌な呼び方を言うから、やめるように言った。

「だって遼ちゃんは遼ちゃんじゃないじゃん」

「朱智君？平沢さん？自己紹介が進まないからちよっとその辺にしておいてくれる？」

平沢が意味不明な事を言った瞬間、先生に注意され、渋々黙る平沢。

「それじゃあ水河君。お願いね」

奈亮の番がきた。どんな自己紹介をするのかと思い、ワクワクしながら聞いた。

「俺は『水河 奈亮』って言います。特技は料理です」

という味っけない普通の自己紹介をして席に座った。

それから約20分後にクラス40人全員＋担任の自己紹介は終わり、桜高第一日目は終わった。

## 第一話『入学!』（後書き）

唯ちゃんの登場です！

本家よりゆるい唯ちゃんになっちゃった気がします、そこは愛嬌でカバーということでは…

## 第二話『部活!』（前書き）

三日連続更新!!

勉強以外にやる事が無くて暇ですw

## 第二話『部活!』

「うん…」

桜高に入学してから二週間ほど経ったある日、俺は自分の机の上に置いてある入部届と書かれた白い紙をな眺めがら唸っていた。

「なあ、遼は入る部活決まったか？」

そんな俺に対して奈亮が嫌味とも思える言葉を発してきた。

「見て分かれよ。やりたい部活は今のところ決まってないし、第一にやりたい部活がない」

まあ、俺はそんなこと全く気にしてないので普通の返事を返した。

「だよねえ」。遼ちゃんもそう思うよねえ」

隣で一緒に唸っていた平沢も俺達の話に乗ってきた。基本的に自由な校風の桜高なのでユニークな部活が数多く存在するが、どれも興味をそそらなかった。そして、元女子校だっただけあって運動部の方はあまり男子に人気な部活は存在しなかった。さすがにバスケットとバドミントン部はあったが。

「だいたい、オカルト研究会とか、ミステリー研究会とか、UMA研究会とか同じ様なやつがいっぱい在りすぎるし、心霊研究会とか、花火研究会に至っては『夏期限定』とかやる気なさすぎでしょ?」

「それに、文科系の部ってよく分からないよね?」

「確かにそれもある」

「うーん……」

「ダメだこいつら……」

一緒にして唸り出した俺達を見て奈亮が頭を抱えた。

「そう言う奈亮は何か部活に入ったのかよお。昨日も俺と一緒に帰ったくせに」

「え？お、俺……？」

俺からの急な反撃に動揺する奈亮。その様子から自分の事は棚に上げていたらしい。

「なんだ。自分の事は棚に上げてたのか……。せこい男」

「うるせえー。やりたい事がねえんだよ」

本当に棚に上げていたみたいだ。にしても部活どうするか……。

「うーん……」

「貴方達何三人で唸ってるのよ」

「あ、和ちゃん」

一人の女子生徒が俺達のところへやって来た。名前は『真鍋 和』

と言う。いつも平沢の近くにいる（まあ、平沢が近付いてるだけなのだが）ので、もう友達と言える存在になっている。

「いやあ、」

「それが」

「ねえ」

「貴方達普通に喋りなさい」

真鍋が多少呆れて言う。ちなみに、「いやあ、」は俺、「それが」は奈亮、「ねえ」は平沢が言った。

「実は、私も遼ちゃんも奈ちゃんもどの部活部活に入るか決まっておらず、え！？まだ決めて無かったの！？もう学校始まって二週間が経つわよ！？」

平沢が話している途中で俺達は真鍋に怒られてしまった。

「でもでも私達、運動音痴だし、文科系のクラブだってよく分からないし…」

「おい平沢。それじゃあ俺達も運動音痴って事になってるぞ」

「はあ…。こうやって二ートが出来上がっていくのね…」

「部活やってないだけで二ート！？」

衝撃的な事を言われ、俺達は声を揃えてそう言った。そして、俺

はそろそろ本当に危ないんじゃないかと思ってきた。

「奈亮と遼の事情は知らないけど、唯は一度も部活したことなかったんだから」

俺も中学の頃は何もしなかったのだが、この際どうでもいい。

「奈亮、俺達本気で考えなきゃまずくなってきたくないか？」

「そうだな。少なくとも平沢よりは早く決めないとな」

俺達は真鍋や平沢に聞こえない様に小声でそんなやり取りをした。

.....

昼休み。俺、奈亮、平沢、真鍋は四人仲良く昼ご飯を食べていた。

「という訳で、軽音部ってところに入ってみました！」

そんな中、平沢が不意にそんなことを言った。

「そうなんだ……」

俺は少し焦りながら言う。

でも、平沢に楽器なんて出来るのだろうか？

それにしても平沢がバンドかぁ。ギター持った平沢っていいな。

「それで、軽音部ってどんな事をするの？」

真鍋の質問に対して唯は、

「さあ？」

「っておい！知らないんかい！軽音部ってバンドやる部活だよ！しかも、軽音部は確かギタリスト募集してたぞ！？」

軽音部がギタリストを募集してたから、ギターを持つてる平沢を想像して「かつこいいな」と思ってしまった俺が馬鹿馬鹿しく思えた。

「ええー！？でも、私ギターなんて弾けないよ？」

「じゃあ、何なら弾けるのよ……」

「……………カ、カスタネット？」

リズム良くカスタネットを叩いている平沢を想像してみる。

「うんたん うんたん」と、楽しくリズムを刻みながら笑顔でカスタネットを叩く平沢……。

「……凄く似合うな（わ）」「……」

真鍋と奈亮も同じくそういった。俺と同じくカスタネットを叩いている平沢を想像したのだろう。

そんな俺達の冷やかしに平沢は「そう？照れちゃうなあ」と言

っていた。それを見て俺達は、

「「「はあ……」」」

と、溜め息を吐くしかなかった。

結局平沢は軽音部を退部する事を決め、放課後に軽音部の人達に伝えに行くらしい。

第二話『部活!』（後書き）

ちょっと短くなってしまってますみません…

次回は長くなる様に頑張ってみます！

### 第三話「退部！」（前書き）

情報処理の時間にかきかきして、やっと更新できました！

昨日、更新したかったんですけどね…

### 第三話「退部！」

「さて、放課後になったし、一緒に帰るか」

「うん」

先程、数学とか言うこの世界最大重要教科の授業から解放され、放課後になった。奈亮からの誘いに俺は頷き、颯爽と爽快に教室を出ようとした。

「遼ちゃん！奈ちゃん！助けてえ〜！」

そんな俺達を引き止めようと小走りでこちらへ来る平沢。そんな光景を見た俺は直感的だが、嫌な予感がした。

「うえ？」

その予感が的中し、平沢は机の脚に躓き、そのまま倒れそうになった。

「おっとつと…」

そして、ケンケンの要領で足元を見てバランスをとりながら俺達に寄って来る。

「つとつとつて！うえ！？」

「は！？」

目の前で止まると思っていた俺だが、その勢いは止まることなく、

予想に反して俺に突撃してきた。

「あいて！」

「ぐふっ！」

咄嗟に避けようとしたが、コンマ一秒の世界で人間が動ける訳がなく、俺と平沢は激突した。入学式にもこんな事があったあの心の隅で思いながら俺はその場に倒れた。

「う、こめんねっ！？ 遼ちゃん大丈夫！？」

平沢が俺を気にかけて言葉をかけるが、当の本人である俺は後頭部を強打し、軽く脳震盪を起こしていた。

「あゝ… 大丈夫に見えるなら眼科へ行ったほうがいい…」

俺は少し悪意を込めていったが、平沢本人は少し驚き気味に「え？ じゃあ、帰りに眼科寄らなきゃ！」と言っていた。……いい加減こいつぶん殴って良いかなあ？

「ほら、本当に大丈夫か？」

奈亮が手を出してくれた。未だにぐらんぐらん揺れる頭を押さえながら、無言で奈亮の手を掴んだ。すると、奈亮が手を引き、俺を立ち上がらせる。

「うあ… 目眩がする…」

立ってみると大分楽になったが、目眩がひどく、気持ち悪い。

「ホントにごめんね…！ 遼ちゃん死んじやだよお…」

「勝手に人を殺すな！」と言いたかったが、いまはそんなことどうでもいいくらいに頭が痛かった。だが、平沢は半ば本気で涙目になっていたので俺は平沢に優しく声をかける事にした。

「大丈夫じゃないけど、あんまり心配しなくていいよ。避けられなかった俺が悪いし…。というか、何か用があったんじゃないの？」

入学式の時も俺が譲歩したが、俺って実は押しに凄く弱いのか？ そんなことを思いながら俺は話を切り替えた。

「うん、そうなんだけど… 遼ちゃん本当に大丈夫？」

未だに平沢は心配していた。このままじゃラチがあかないので、

「もう大丈夫だよ」

という事にした。

「なら良いんだけど……」

だが、平沢はまだ納得いかない様子だった。

「大丈夫、大丈夫だから」

俺が念を押すと、

「本当に？」

と言ってくる。平沢は意外と心配性らしい。というか、ついさっき俺が大丈夫だと思ってたじゃないか。どいう風 of 吹き回しまわしだよ…。

「ホントホント。もう大丈夫だつて」

「なら良かった」

やっと平沢が笑顔になってくれた。なんか、平沢はいつも無邪気な笑顔で笑ってるから、その顔を悲しみの色に変わるのは何故か嫌な気分になる。物凄く罪悪感が生まれるのだ。

そして、気が付くと頭の痛みも消えていた。

「で？なんの用だよ」

というか、帰ろうとしていたところを呼び止められているので実際は早く帰りたいのが本音な訳で、用があるならさっさと済ませてしまいたい。

大体は想像出来るが…

「じ、実は…軽音部の人達に「退部します」って一人で言うのが怖くて…。だから、一緒について来て欲しいなあ…って…」

平沢が両手の人差し指同士を付けながら少し上目遣いに言ってくる。感想を言うと凄く可愛かった。まあ、本人には言わないけど。

「俺はいいけど、奈亮はどうする？」

でもまあ、友達の頼みを断るような心の狭い奴では無いので、平沢の頼みに頷く。

「いや、俺は夕飯の買い物したり洗濯したりで忙しいから無理だな」

「そっかあ…残念…」

「じゃあ、俺は先帰るぞ」

「うん」

俺は奈亮を見送ると、平沢と一緒に軽音部の部室である音楽室へ向うことにした。

「んじゃ、行くか」

「うん！」

・・・・・・・・

「こ…怖いよう…」

「あのなあ平沢、歩き難い事この上ないんだけど…」

今は音楽室へ向かう際に通る事になるこのオカルト研究会やらUMA研究会やらの色々とそれ関連の部室が連なる廊下にいるのだが、どうやら平沢はそれらが怖いらしく、俺に抱き着きながら覚束ない足取りで進む。

「だつてえ…」

「はあ…」

俺はいつこうに離れようとしないうちに平沢に対して溜め息が出た。この状況は嬉しいんだが、実を言うと俺も内心かなり怖がったりする。

「ほら、後は階段上がるだけだからいい加減離れろ」

「もう少しこのまま」

急に機嫌を良くし、俺の頭を撫でだした。いや、いいんだけど、絶対に人に見られたくない絵だったりする。

「あ、貴方達…仲良いのね…」

「あ、いや…これは…」

「あ、先生だ」

今、この状況を音楽の山中先生に見られてしまった。やまなか

「音楽室へ行くの？」

「はい」

「俺はこいつの付き添いです」

「そう。音楽室はここを上がってすぐだから。あと、くれぐれも校内でそんなことしない様にね…」

山中先生はそう言つと階段を下りていった。

「ほら行くぞ」

「うん！」

平沢はやっと俺から離れてくれた。

階段を上がり、音楽室の前に来ると平沢は少し浅く深呼吸をした。

「ふう…よしっ！」

そう言つて音楽室のドアに手をかけようとしたら、何故かその手を止めた。

「あわわわわわ…」

すると、何故か困惑したかの様に声を上げる。いや、困惑してるのか…。

「どうした平沢？」

「どうしよう…」

平沢がそう言った瞬間、うしろからやって来た女子生徒が平沢の肩をポンと叩いた。

「ひいいい…！」

何故か平沢は大声をで叫び、この世の絶望でも見たかのような涙目になり、「違います違います……」と息継ぎをせずに何度も言っていた。

そんな平沢を見て俺はこう思った。

「（平沢って肺活量凄いな）」

「あ、天然でテンポが悪くて使えないドジっ娘！」

女子生徒は平沢の顔を見るなり物凄く失礼な事を言った。否定はしないけど…。

「あ！もしかして貴女が入部希望の平沢 唯さん？」

「え！？は、はい！そ、そうです！！」

実際は退部希望だけだな。

「そつかあ！色々と誤解してごめんね！ギター物凄く上手いんだってね！来てくれるの待ってたよー！！」

平沢に在らぬ尾びれがついていた。

「君も？」

「いや、俺は「入部希望！？ホントに！？やったあ！これで数が揃ったよ！」……………おい……」

俺はこの女子生徒のマシニングトークについていけなかった。

「みんな！入部希望者が来たぞ！しかも二人もだ！」

女子生徒は音楽室のドアを勢い良く開けるや否や、笑顔で音楽室にいた女子生徒二人にそう言った。

「本当か！？」

「まあ！」

女子生徒二人は目を輝かせ、こちらへ顔を向ける。

「歓迎しますわー！」

歓迎されてしまった。

「ムギ、お茶の用意だ！」

「はい！」

ムギと呼ばれた女子生徒は多少の急ぎ足でティーセットの置いてある机へ向かった。

「ほら、二人とも座って座って！！」

突然な事にポカンとしている俺達を音楽室の窓際近くにある席に座らせられ、目の前に紅茶とケーキが置かれた。

「（ここは本当に軽音部なのか？）」

俺は心の中でそう思いつた。本当に平沢が退部宣言が出来るのか

心の底から心配になって来た。

### 第三話「退部！」（後書き）

だんだん遼くん言葉遣いが丸くなってきた？

男の人の口調って難しいです…

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8756y/>

---

けいおん ～奏でる物語～

2011年11月30日11時55分発行